

[研究ノート]

## A. C. マックレーと明治初期の弘前城

—— 『日本からの書簡集』より ——

北原 かな子

はじめに

明治初期は、日本政府から招聘された人々を始めとして、宣教師、商人など数多くの外国人が日本を訪れるようになった時期である。津軽地方弘前にも、明治6年のウォルフ夫妻を始めとして、明治13年で一旦途切れるまで、約10名ほどの外国人が滞在した<sup>1)</sup>。その多くは、明治5年に開学した私学東奥義塾<sup>2)</sup>の教師として招聘された人々であり、弘前滞在中の体験を書簡や日記の形で残している。こうした記録は、当時の弘前の様子や訪れた外国人自身の異文化体験を知るうえで貴重であるが、これまでその内容はあまり知られてなく、研究例も必ずしも多くはない<sup>3)</sup>。

なかでも2番目に弘前に来たアメリカ人アーサー・C. マックレーは、従来その存在すら顧みられることがなかった人物である<sup>4)</sup>。たとえば彼が勤務していた東奥義塾においても、マックレー本人と伝えられる写真が2枚残されている他は、マックレーに関する資料は極めて少ない。明治期に書かれた各東奥義塾史にも名前が記載されていなかったり、あるいは間違っていたりしている状態であり、<sup>5)</sup>最初に東奥義塾に着任したウォルフ、あるいはマックレーの後に同校で教鞭を取ったイングに比べると、非常に影の薄い存在であったと言ってよい。

マックレーは、日本で数年間教師をして明治11年初めにアメリカに帰国した後、自らの経験を書簡集の形でまとめた日本体験記を出版した。その中には、明治7年に教師として着任した東奥義塾の様子は勿論のこと、旧弘前藩士族や弘前市中に関する記述も数多く含まれている。特に廃藩置県後の弘前城内の描写は、当時の様子を知るうえで、非常に興味深い内容となっている。

本稿ではまず最初に、従来ほとんど知られていなかったアーサー・C. マックレー自身の経歴と、出版当時のアメリカでは非常に脚光を浴びたにもかかわらず日本では注目されてこなかった、いわば埋もれていた本である『日本からの書簡集—日本での仕事と旅の思い出』について述べる。その上で、彼の本の中から「弘前城」の部分を全文紹介していきたい。

### 1 アーサー・C. マックレー

アーサー・コリンズ・マックレー (Arthur Collins Maclay) は、宣教師ロバート・サミュエル・マックレー (Robert Samuel Maclay) の次男として、1853年8月14日、香港のヴィクトリアで生れた<sup>6)</sup>。父ロバートは、中国での宣教活動に従事した後1873年6月に来日、日本でのキリスト教の普及に努めるとともに、後に弘前出身の本多庸一と共に青山学院の基礎を築き、

初代院長を努めた人物である。母ヘンリエッタ（Henrietta Caroline Maclay）も夫と共にキリスト教の宣教に生涯を捧げ、日本で永眠した。

マックレーは、父の仕事の関係で子供時代のほとんどを中国で過ごし、15歳になったとき大学教育を母国アメリカで受けるため、母や、兄ロバート・（エドワード）・ホール・マックレー（Robert [Edward] Hall Maclay）と共にアメリカに帰った。その途中、マックレー達はわずかな期間ではあったが日本に立ち寄っている。帰国後のマックレーは、1869年にコネティカット州のウェズリアン大学 Wesleyan University に入学し、1873年に大学を離れて来日した<sup>17)</sup>。

日本滞在中のマックレーの足跡は、外務省資料などからたどることができる。マックレーはまず最初に、「青森県士族榊喜洋外一名」によって弘前町東奥義塾に雇われたことが、明治7年3月9日付で外務省記録『外国人雇入鑑（自明治5年）』に記載されている<sup>18)</sup>。また『内務省年報』によると、

マックレーは菊池九郎他一名によって東奥義塾に雇用され、契約期間は明治7年3月15日から11月15日まで、給料は150円となっている<sup>19)</sup>。このほか、明治7年当時青森県令であった塩谷良翰の回顧録の中にも、「東巡録青森縣学校」記事からの録載として「東奥義塾は3月中米人マクレーを雇ひ11月期満て雇を止め」<sup>10)</sup>と書かれており、マックレーは3月中旬過ぎから11月頃まで弘前に滞在したことはほぼ確実と見られる。なお、旧藩主津軽承昭は、明治7年春の外国人教師交代に際して千数百円を東奥義塾に贈っている<sup>11)</sup>。

弘前を離れた後のマックレーは、工学寮小学校教師として明治8年1月11日より、無期限、月給130円、宿料金20円で雇用されたことが、『官雇入表（自明治九年）』と『外国人雇入取扱参考書共四（自明治九年至明治十年）』からわかる<sup>12)</sup>。担当は英語であった。また『工部省沿革報告』には、マックレーが工学寮小学校に明治8年1月11日より雇用されたことに加え、明治10年6月30日に解約された旨も記載されている<sup>13)</sup>。解約理由は明記されていないが、明治十年六月に同校が経費節減のため廃止されたことによると考えられる<sup>14)</sup>。

工学寮を離れた後、マックレーが勤務したのは京都の中学校である。『官雇入表（自明治九年）』によると、彼は京都府によって明治10年7月6日より一年の契約で雇用されていることがわかる。しかしここでは同じ頁に「条約違反のため解雇」とも記載されており、通交免状も契約半ばの10年12月24日に「返納」となっている<sup>15)</sup>。そしてこの京都の中学校は、マックレーにとって日本滞在中最後の勤務校になった。彼は明治11（1878）年初めにアメリカに帰国したからである。



*Arthur C. Maclay.*

（A.C. マックレーの写真と自筆のサイン）

帰国後のマックレーはコロンビア大学 Columbia University で法律を学んだ。優秀な成績で学業を終えた後、ニューヨークで弁護士の資格を取得、1880年から1900年まではニューヨークで弁護士業に携わった。その一方で中国や日本にいた時の経験を生かし、ニューヨークで東洋や日本に関する講演も行っている。1900年以降は著述業に従事して、1930年11月11日にアメリカのニュージャージー州でその生涯を終えている。以上の経歴からわかるように、マックレーは宣教師一家に生れ育ったものの、両親や兄弟達と異って宣教師の道を歩まず<sup>16</sup>、日本では教育関係の仕事に携わり、アメリカ帰国後はそれまでの経験をいかして、法律関係の仕事の傍ら日本や中国を紹介する活動を行なった人物であった。

## 2 マックレーの『日本からの書簡集』

マックレーはアメリカに帰国した後、弁護士業あるいは講演活動のかたわら、『日本からの書簡集—日本での仕事と旅の思い出（原題 *A Budget of Letters from Japan: Reminiscences of Work and Travel in Japan*, 以下『書簡集』と略記する）』<sup>17</sup>、『水戸屋敷—古き日本の物語 原題 *Mito-Yashiki: A Tale of Old Japan*』<sup>18</sup>の2冊を著した。『水戸屋敷—古き日本の物語』は、「ジャパン・ウィークリー・メール」*The Japan Weekly Mail* の書評でも取り上げられ<sup>19</sup>、『書簡集』もまた1886年の出版当時、アメリカにおいて70以上もの書評を獲得するなど<sup>20</sup>、どちらもかなり注目を集めた本であったようである。特に本稿で取り上げる『書簡集』の書評を見ると、たとえば「日本人の特性を理解するうえで、最も知性的で理想的な本」、「日本について、これほど充実し、信頼がおけ、興味深い内容の本は他にない」<sup>21</sup>とあり、19世紀後半のアメリカで、この本が日本を理解するうえで優れていると受けとめられた様子が窺える。

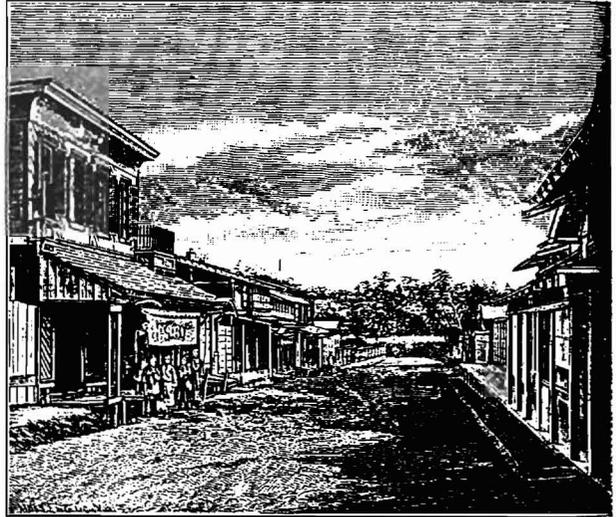
この『書簡集』の内容は副題からもわかるように、弘前、京都、東京での教師としての体験と日本各地を旅行した際の印象記、及び日本の風俗習慣などについての聞き書きや考察などから構成されており、いわば20代前半の若きアメリカ人の目に映った明治初期日本の記録である。マックレーはこの『書簡集』を書くに当たって、架空の主人公プラットを設定した。しかしこの主人公プラットの行動は、少なくとも現在確認できる弘前、東京、京都での仕事に関する限り、前述したマックレー本人の行動とほぼ一致する<sup>22</sup>。またマックレー自身、この本の序文に、「一つには気晴らしのため、もう一つには正確な情報を残しておきたいとの希望から」自分自身の体験を書き残し、これらを基にして一冊の本にまとめる際、「自分の観察や経験を他の人々に伝えるには、書簡集の形をとることがもっとも適切である」と考えた旨を書いている<sup>23</sup>。こうしたことからみて、この本はあくまでマックレーの体験記であり、マックレーとプラットの二人は事実上同一人物と見て差し支えないと考えられる。

マックレーはこの本を、日本についてほとんど知らないアメリカの友人に宛てた、21通の手紙で日本を紹介するという形で著した。その中にはマックレーが日本で見聞した事柄そのものに加えて彼自身の考察や調べたことなども加味されている。たとえば初任教東奥義塾での学生達との触れ合いを書いた部分に続けて、当時の日本における外国人教師達の位置づけを説明し

たり<sup>124)</sup>、あるいは隣人達が奏でる笛の音について書いた場面で、日本の音楽全般に関して考察したりしている<sup>125)</sup>。

これは、同じ日本体験記でも、明治4年に福井藩から招聘されて藩校明新館で教鞭をとったウィリアム・E・グリフィス (William Elliot Griffis) の日記形式で書くのとは違った形ではあるが<sup>126)</sup>、マックレー自身の体験が吟味かつ整理され、日本に関する様々な項目が比較的要領よくまとめられた上で記述されているために、彼の目に映った日本が読者にわかりやすく伝わってくるのも事実である。そしてそれが、前述したように『書簡集』が高い評価の書評を獲得した理由の一つでもあったと考えられる。

また、この『書簡集』には、これまで知られていなかった、当時の様子を知る手がかりも、幾つか含まれている。たとえば、マックレーが教鞭を取った明治7年の東奥義塾、明治8年か



STREET SCENE IN HIROSAKI.

(A.C. Maclay : *A Budget of Letters from Japan* より)



IWA-KI-SAN (STONE-AND-TREE MOUNTAIN) AS SEEN FROM THE RAMPARTS OF HIROSAKI CASTLE.  
(From a Native Photograph.)

(A.C. Maclay : *A Budget of Letters from Japan* より)

ら10年にかけての工学寮小学校は、共にその様子がよくわからないとされている学校であった。実際、東奥義塾はマックレーが着任した時財政的困難に陥っていたこともあり、資料も少なくその具体的な様子はほとんどわかっていない。工学寮小学校についても同様である。『工部省沿革報告』に明治7年2月2日に開校し工学寮に入学希望する私費の学生を受け入れたこと、明治10年6月に経費節減のため廃校となったことが記載されている程度であり、『東京大學百年史』にもこの小学校に関する記録は乏しいと書かれている<sup>(27)</sup>。『書簡集』の中には、彼が勤務した東奥義塾と工学寮小学校について詳しく描写され、特に工学寮小学校については教えていた学生達の英作文もそのまま載せられているため、明治7年から10年頃にかけての日本の洋学受容の一端を推し量ることができる。

さてマックレーは、来日して横浜にしばらく滞在した後、東奥義塾関係者と8カ月間の契約を結び、海路北上して函館経由で青森に上陸した。そのときの印象を「すべてが音もなく暗い。街灯さえどこにも見当たらない。ここはまさに本当の日本なのだ」<sup>(28)</sup>と記述しており、彼にとってはわずかながら滞在した横浜の、活気のあるコスモポリタンの印象とは全く異なる、「奥地 (interior)」弘前で生活を書くことが、本来の日本の姿を伝えることになると考えていたことを窺わせる。そのためかこの中には当時の弘前市内や人々の様子 (特に没落した士族達)、彼自身が教鞭をとった学校の生徒の日常生活や建物<sup>(29)</sup>など、明治7年当時弘前のこれまで比較的知られていなかった部分、さらにマックレーとほぼ同時期に弘前に滞在したカトリック宣教師アリヴェとの確執<sup>(30)</sup>や、攘夷思想がぬけきらなかった<sup>(31)</sup>弘前で、異邦人が単身で生活することの苦労や孤独などが、詳しく書かれている。

こうした数々の弘前関係の記述の中でも注目に値するのは、弘前城に関する部分である。マックレーは二の濠を越えた最初の西洋人であった。彼が弘前城に非常に関心をもっていたことは、帰国後にニューヨークで講演活動をしたときの資料にわざわざ「弘前城」の項目を設けて説明していることからわかるが、<sup>(32)</sup>この『書簡集』にも、彼自身が三の丸から本丸御殿に至るまで歩みを進めていった過程にそって、城内の様子が描かれている。これは廃藩置県後の弘前城内の様子が詳らかではない現在、我々にとってもきわめて興味深い内容となっている。そこで、次節では、マックレーの筆による弘前城に関する部分を全文訳出し紹介することにする。

### 3 『書簡集』に描かれた「弘前城<sup>(33)</sup>」の紹介

この周辺で、僕に文明を思い起こさせるのは、お城くらいのものです。朝、正午、夕暮れと一日3回城内に鳴り響く軍用ラッパの生き生きとした音は、なにかしら僕の心を奮い立たせるものがあります。

城内には約千人の駐屯兵がいます。彼らは黄色の縁取りがついた青い制服に身を包み、スナイダー銃やシャープ銃で武装しています。これらの兵隊達の出身地は様々です。というのも、政府は暴動を起こさせないよう、同じ地方からきた兵士だけで連隊を組織することを避けてい

るからです。彼らは背丈は小さいのですが、気骨があり、強壯です。彼らは非常に規律正しく、上司には絶対服従をし、物静かで整然としています。彼らがお酒を飲んでいるのを見ることはめったにありませんが、いったん酔っ払うと、喧嘩早くなるというよりはむしろ子供っぽくなります。

週に約1度、駐屯兵達は地方への行軍のために、大挙して繰り出します。彼らはきわめて整然と市街を行進し、たとえその中の大多数が敵対していた藩から来ていたにしても、街の人々から大変尊敬をもって扱われています。政府は約3万5千人の常備軍を擁しています。そのうちの多くは東京の兵営に駐留していますが、その他の兵士達は日本中至る所にある城郭を占めています。

私は弘前城の中を見物したいと強く希望していました。というのも、弘前城はかなり保存状態がよかったからです。それゆえに私は学校当局を通して正式に要請しました<sup>341</sup>。当初彼らは、すっかりジレンマに陥ってしまいました。というのは、これまで、二の堀をこえた白人はいなかったため、拒絶されることを非常に怖がっていたからです。しかし、たまたま1人の学校関係者の兄弟が連隊の将校であったことから、彼の好意的な取りはからいで、ある日曜日の午後に弘前城を訪れてもよいという許可がありました。それはその日がすべての将校の手が空いていたからでした。

約束の日、学校関係者全員が正装して、広大な城内をくまなく付き添ってくれました。その日の午後は天候にも恵まれ、将校達もきわめて丁寧であり、視察についてもなんら制限が加えられることもありませんでした。実際私たちは、非常に楽しい一時を過ごすことができたのです。

日本のお城は大体皆似たような構造をしています。これらはすべて同じ普遍的な設計に基づいて建設されています。日本全体では約150ほどありますが、規模や年代は様々です。この封建時代の要塞の建築様式は、13世紀の大名の一人であるヤマモトから始まっています。専門家によってはこの城の様式の源をこれよりさらに4世紀ほどさかのぼると推定し、最初の城は本州のすぐ南にある四国に建てられたとする者もいます。

「お城」という用語は誤解を招きやすいように感じます。というのは、高い崖の上によく見られるヨーロッパの強固な石造りの城壁と違って、これらの要塞は高い壁が視界にはいつてくることは稀で、一般にゆるやかな起伏のある土地か、あるいは平坦な土地に建てられています。理想的なのは、適度に険しい丘が中心の近くになるように濠と土塁を配置して、天守閣の強さを増強するのに役立てることです。一般に城壁は三重構造になっており、大きい城壁が小さい城壁の回りを取り囲むようにして作られています。最も外側の城壁は、周囲2マイルから4マイルほどで、最も内側の城壁は数百ヤードの重厚な囲いとなっています。

日本で最大のお城は東京にあります。最も外側の城壁は全周10マイルをこえ、実際、首都の一部分は最初と2番目の城壁の間に作られています。次に大きいのは、東京から約百マイルほど南西にある、静岡のものだと言われています。しかし、これは、首都のお城の約半分もありません。

日本中の島々に分散している、これら中世風の遺跡は、彼らが象徴している往時の権力機構よりもより永続性のあるものとして、好奇心あふれた旅行者が地方を旅するときに、彼らの目を楽しませてくれます。

さて、あなた自身が弘前のお城の側に立っているところを心に描いてみてください。われわれの前にあるこの最初の部分 [三の丸] は、粗削りの花こう岩で作られた広い濠によって囲まれています。濠の向こう側には、厚く芝生でおおわれたゆるやかな傾斜の土塁が、約12フィートの高さにそびえています。その一番上は、堅固なとがりくいの柵と漆喰で固めた壁で守られており、さらにそのすぐ後に、松並木があります。この松並木は、ここを美しくしているのに加え、この土塁の防御性をさらに強める役目をしてしています。この濠と土塁は約2マイルにおよびますが、その途中には、崖の部分も横切っています。城内の外壁部分が幾つかの丘を貫いている東京の城の場合、それぞれの個所で大規模な切り崩しと、途方もない労力が必要だったことでしょう。

今われわれはこの壊れやすい橋を渡って、濠を渡ります。この橋は緊急時に際して速やかに破壊できるようにわざとこのように造ってあるのです。あなたは、ノルマンの要塞の深い冷え冷えとした割れ目にかかるような、有名な跳ね橋が日本では見られないことを心に銘記しておかなければなりません。

向こう側には、鉄の板でおおわれた重厚な木造両開きの扉をもった、二階建ての門<sup>35</sup>が立っています。二階の方の頑丈な格子窓は、下方に攻めてきた兵隊達にたいして、弓矢を自由に使えるようによく工夫されています。重厚に瓦でふいた切妻屋根の端からは、青銅製の魚が、勢いよく宙に向かって躍り上がっています。一方、屋根の隅の方からは、不気味な鬼<sup>36</sup>が攻めてくる敵を威嚇しているのが見えます。門の明るい白色の漆喰の部分が、土塁ののび灰色の石や濠の水と、好ましい対照を呈しています。少し離れて、用心深く配置された松の並木を通してのぞいてみると、その外見は著しく異様なものになります。

さてわれわれは最初の囲い [三の丸] に入ります。ここはこの城内のかなりの部分を占めています。長い松並木が二の濠の方に続いています。この土地全体が、きれいに芝生でおおわれ、ここには大名の家臣の営舎も並んでいます。昔はきっと彼らがここで 剣術や戦争に関する武術の練習をしていたことでしょう。この囲い [三の丸] は城内に居住する人たちの散歩道の一つとしても使われていました。また、ここには閱兵場、果樹園、井戸、椿と背の低いツゲの木を縫うようにして通っている日陰の多い並木道もあります。

二の濠は一の濠より広く深くなっています。幾つかある門や櫓はより重厚で、土塁にそってより短い間隔で設置されています。もう一つの橋を越えて、われわれは二つ目の部分 [二の丸] に入ります。広さは今見てきた所に比べて約10分の1くらいです。しかし、この土地ははるかに高低の差があります。ここは要塞化した公園です。この場所の一般的な外見は、竹林の中の至る所に曲がりくねった細い道がある、きれいな庭園です。門の近くには幾つかの番所<sup>37</sup>があります。ここでは我々が君主に敬意を表する訪問者が、閣下が彼らを喜んで迎えてくれるまで、しばしの間家臣達とおしゃべりに興じたことでしょう。

道にそって丘を降りると、我々は長い耐火性の「倉庫」のところにたどりつきます。ここは戦争の時に使う、前近代的な用具を蓄えておく兵器庫として使われていました。右の方には、香りのよい夾竹桃の並木を通して矢場が見えます。丘の下の方には養魚池があります。秋になると、蝦夷から来た真鴨が、池を縁取る蓮の花や睡蓮の花の中で、しばしの間喜んで遊んでいます。2番目の囲い〔二の丸〕は、大名と何名かの選ばれた家臣達の私的な遊歩場になっています。

さて我々は、城壁の3番目で最後の部分にやってきました。ここにはお城〔天守閣〕があります。櫓と塁壁は、非常に重厚になります。ここの土地が小高くなっているため、それがこの場所を強くするのに巧みに貢献しています。崖が陰しく切り立った側には、石でできた銃眼付きの胸壁のみが上に続いています。しかし、一つの通用口がこの最後の部分〔本丸〕につながっています。

ここに入っていくと、我々は宮殿を見ることができます。宮殿を取り囲んでいる庭園は、日本人の最高の技術で設計されています。金魚のいる池、日陰になった歩道、富士山を象徴する人工的な小山、などが、好ましい多様性に富んで、あたりにちりばめられています。

宮殿の建物自体は、外観をすべて見た限りでは、あなたを失望させるかもしれません。これは、単にとっても大きくて広い単純な日本の家屋で、青銅の板でおおわれた非常に大きく重い屋根をもっています。素晴らしい縁側が、この周りを完全に取り囲んでいます。すべては木でできています。しかしながら、内部はもっと興味深いものです。ここは平屋です。すべての部屋はとても天井が高く風通しがいいのです。これらの部屋は上品に漆で塗られた枠を持つ、非常に美しく装飾された障子（紙で作られた可動性のドア）によって、それぞれにわけられています。襖の上には、自然に題材をとって美しく創作された図案を見ることが出来ます—山、野原、川の流れ、などが、日本人の優れた技術で描かれています。床は最上の畳でおおわれています。2、3の愛らしい屏風と、幾つかの素晴らしい青銅や漆塗りの作品が、この住居の室内装飾を仕上げています。というのは、日本人には、家具などの室内調度品が全く欠けているからなのです。部屋の天井は、通常四角の羽目板で仕上げられており、そこには、金箔が塗られたうえに龍や妖精が描かれています。尾張の国の信長の宮殿の室内は、もともと羽目板に純金の板をはめ込んであったといわれています。

ここまで述べたことからわかるように、これらの宮殿は非常に広大です。訪問者は明らかに終わりそうもない、念入りに作られた迷宮のような数々の部屋を次々に通されるうち、次第に困惑してくるでしょう。

概して、いちばんいい部屋は、拝謁の間になっています。ここは訪問者の心を大名の富と権力と寛容さで圧倒するべく、多くの芸術家達の技術を結集して作られています。威厳のある虎が、金箔の襖の上で、うずくまっています。2匹の獰猛な獣が激しい戦いをしているのもみることができます。不死鳥とクジャクが、芸術家が想像上で描いた植物の、豪華な枝にとまっています。一方、部屋の下手の方の端には、中国の歴史の場面が描かれており、これはこの部屋の両側全体を占めています。

限りなく続く多様な意匠のなかに、偉大な創意工夫を見て取ることができます。全く同じものは、二つとありません。美しくかざられた壺の中で、蓮の花が育っています。その同じ蓮の花が、向こうの堀の中のすげ属の植物のそばで咲いているのも見ることが出来ます。さらに僧院の陰りある土地を貫流する山の清水のほとりでも、蓮の花が豪華な花びらを広げています。そして再び、皇帝の池に咲くユリのそばで、その蓮の花の情熱的な輝きを捉えることができます。日本に関連した歴史的な場面はほとんどありません。中国は、靈感（インスピレーション）の古典的な源なのです。

優美さと美しさに関しては、京都、尾張、そして江戸のお城が、最高でしょう。日本のお城には類似性があるので、宮殿もあっと驚くほどの多様性の傾向はほとんどありません。

1868年から1870年にかけての明治維新以来、地方にあったこれらの要塞はすべて中央政府に引き継がれました。すべての城の持ち主は、東京に送られ、政府の監督下におかれました。たくさんのお城が、荒れるままになっています。といっても、幾つかの優れたお城は、かなりよい修復状態に保たれ、外国から来た旅行者の視察のために開放されています。しかし、大多数は、駐屯兵の兵舎となり、古くからの調度品や装飾品は失われてしまいました。数多くの青銅、ほとんどの優美な漆（漆、まき絵）は、今はヨーロッパやアメリカの裕福な人々の家庭に飾られています。

現在、広い室内には上下に組み立てられた、粗末に作られた寝台の骨組みの長い列を見ることができます。拝謁の間には、マスケット銃が山積みになっています。人が隣接する寝台の下を通る序でにけ飛ばすため、床には軍人用のナップサックと乗馬用の靴が乱雑に散らかっています。障子と畳は取り除かれ、将校達によって専有されたわずかな部屋以外に、これらの部屋の以前の状態を思い起こさせるものは、ほとんど残っていないのです。

#### 4 むすびにかえて

以上の弘前城に関する記述には、時折江戸城や名古屋城に関連した記述も混じってくるが、これは前述したように、この本が基本的に1880年代のアメリカの人々に日本を理解してもらうという設定で書かれているため、弘前城の説明に加えて日本の城そのものを説明しようとした意図があったためと考えられる。

さてマックレーが書いた弘前城内について、当時の弘前城内の地図と比較してみたい。弘前城内は何度かその内部の様相がかわっているが、ここではマックレーが弘前城に入った明治7年当時に比較的近いと考えられる、「明治三季八月現在御本城絵圖（以下①図と略記する）」<sup>(38)</sup>、「明治初年弘前市街図（以下②図と略記する）」<sup>(39)</sup>を用いる。

マックレーが弘前城に足を踏み入れたのは、おそらく追手門からであった。この門はマックレーが教鞭をとった当時の東奥義塾の建物のすぐ近くに位置している。鉄板の付いた重厚な木製扉をもつ二階建ての追手門の二階部分には、現在も頑丈な格子窓がついている。三の丸に入ると長い松並木がつづくと書かれているが、②図には、追手門から二の濠のほうに並木が続い

ている様子が記載されている。二の丸に入ると通用門の近くに幾つか番所があるとなっているが、①図によると二の丸門（南内門）の近くに3カ所見張用の詰所が設置されている。また同じく①図には、二の丸に入って左方の坂を下っていった所にいくつか「武器倉」があり、マックレーが書いたとおりになっている。その先の右方には「矢場」が見えると書かれているが、②図のこの周辺は「矢場」となっている。三の丸と二の丸の部分を見るかぎり、おそらくマックレーは実際に城内を歩いて観察した結果を書いたと考えられる。たとえば地形に関する記述、特に二の丸に入ったとき、坂を下りていくと池があると述べている部分などは、地図を見ただけでは分からないところである。

これに続く本丸御殿については、マックレーがその内部に入ったと書いていること自体が興味深い点である。というのは、従来廃藩置県の本丸御殿が後どのような状態に置かれていたのかよくわかっていなかったからである。明治4年末には武芸所と共に取り壊された<sup>40)</sup>とも言われている。しかし、明治5年4月から6月頃にかけて本丸御殿を含む旧城郭の建物についての記述が幾つかあること<sup>41)</sup>、また、明治10年前後と推定される弘前城内の、天守閣の背後に本丸御殿の屋根の部分がはっきり映っている写真<sup>42)</sup>も存在することなどから、マックレーが書いたとおりの、廃藩置県後も本丸御殿のかなりの部分が残っていたことも十分に考えられる<sup>43)</sup>。現在のところ、本丸御殿の見取り図は残っているものの、詳しい室内の様子が分からないため、この部分のマックレーの文章を検討することはきわめて困難である。しかし、三の丸の門の周辺や城内の地形についての彼の記述は、現在もそのまま残っていることを考えると、多少の表現上の誇張があるにしても、マックレーが本丸御殿内部を見たと書いたことは、ほぼ疑いないのではないかと推察される。文中で中国の歴史の場面がかかっていると指摘している部分などは、中国で育ってきたマックレー自身の経験が活かされていたものであろう。

すでに述べたように、マックレーは『書簡集』の序文に、実際に観察したり経験したことを基にして『書簡集』をまとめたと書いている。本稿で紹介した弘前城に関しても、彼が実際に城内を歩いたことは確実であり、この弘前城の部分はマックレーの『書簡集』の評価を高めているとも言える。

マックレー自身は『書簡集』を1880年代のアメリカの人々に、日本をわかりやすく伝えるという目的で書き、弘前城も紹介した。それから百年以上経過した現在、彼の記述は日本人である我々に、当時を知るための貴重な手掛かりを与えてくれていると言えよう。

付記 本稿執筆に当たり、廃藩置県後の弘前城に関して、藤崎町在住の佐藤幸一氏より数々の貴重な御教示を頂きました。心より感謝申し上げます。

## 註

(1) 明治6年から13年まで弘前に居住した外国人達は次のとおりである。

ウォルフ(C. H. H. Wolff)夫妻、アーサー・コリンズ・マックレー(Arthur C. Maclay)、

ジャン・バティスト・アルトゥール・アリヴェ (Jean Baptist Arthur Arrivet)、ジョン・イング (John Ing) 夫妻とその子息ジョニー、デーヴィッドソン (W. C. Davidson) 夫妻、ロバート・F. カール (Robert Froyt Kerr)

以上のうち、カトリックの宣教師であったアリヴェと、イング夫妻の子息であったジョニー以外は、東奥義塾の外国人教師であった。

長期間ではなく、数日間弘前近郊に滞在した外国人は、函館から宣教師が訪れたという記録がいくつかあることから、ここにあげた人々以外にも何名かいたと考えられる。旅行者として弘前近郊の黒石を数日間訪れたイザベラ・バード (Isabella Lucy Bird Bishop) もその一人で、彼女は明治11年当時の東奥義塾生徒達や黒石のねぷたの様子を『日本奥地紀行』(高梨健吉訳、東洋文庫、平凡社、1973) に書き残している。(原題 *Unbeaten Tracks in Japan*, New York : G.P.Putnam's Sons, 1880. (新版) Charles E. Tuttle, Tokyo, 1973.)

- (2) 東奥義塾は旧藩主津軽承昭の財政援助を受け、旧弘前藩士族有志によって設立された私学である。幕末から明治初期にかけて弘前藩で購入した洋書なども引き継がれるなど、藩校の流れを汲んでおり、洋学に力を入れた学校であった。開学とほぼ同時に外国人教師を招聘したが、財政難などの理由で明治13年にカールが辞職した後は、外国人教師の招聘をいったんやめている。
- (3) ウォルフ、マックレー、アリヴェ、イング、イング夫人、カールがそれぞれ書簡や日記を残している。以上のうち、ジョン・イングやイング夫人、ウォルフが書いた手紙に関しては、次の各研究の中にいくつか紹介されている。

本多繁『続・米国のプロテスタントイズムと日本人—忘れられた明治の基督教学校と宣教師達—』(明治プロテスタントイズム研究所、1994)、山本博「弘前からの最初の米国留学生達—津軽の英学(その4)—」(『弘前大学教養部文化紀要第21号』1985)「ジョン・イングと弘前バンド—津軽の英学(その5)—」(『弘前大学教養部文化紀要第26号』1987)

- (4) 明治7(1874)年当時在学した佐藤清明は、ウォルフのあとに「マックリ先生」がいたと述べている(佐藤清明「懐舊雑話」(『東奥義塾再興十年史』回顧録、東奥義塾、1931、p.24)。これ以外にマックレーの人物に言及した文章は、管見の限り長谷川虎次郎の『菊池九郎先生小傳』にわずかながら出てくるのみである。ここにはマックレーが弘前に滞在した時21才の大学生であった事に加えて、「活発なる生氣に満ちよく學生等に接して、常に朋友の如き態度を持し、米國の文物制度を紹介して之れを實際化せしむるに努め、當時の青年學生に一の輝かしき希望を持たしむるに力あった」と書かれている(長谷川虎次郎『菊池九郎先生小傳』(菊池九郎先生建碑會、1935、p.28)。
- (5) 明治11(1878)年に出版された『東奥義塾一覽』に「アメリカウ井スレヤン大學校 第一級生 明治7年春就職同年冬解職 アルサル、コリンズ、マクレー」(『東奥義塾一覽』東奥義塾、1878、p.35)と書かれているが、同書に収録されている開学当初のいきさつ

を書いた「東奥義塾来歴」にはなぜか名前が明記されていない（「東奥義塾来歴」前掲『東奥義塾一覽』、pp.4-5）。また、明治41（1908）年発行の『弘前市立弘前中学東奥義塾沿革誌』の「創立當時及其後ノ職員」の明治7年7月現在のところでは、マックレーではなくウォルフの名前が誤って記載されている（『弘前市立弘前中学東奥義塾沿革誌』東奥義塾、1908、pp.26-27）。

- (6) マックレーの経歴に関しては次の資料を参照した。

*Alumni Record of Wesleyan University*, Third Edition, 1881-3, p.487.

*Alumni Record of Wesleyan University*, Fourth Edition, 1911, pp.699-700.

*Alumni Record of Wesleyan University*, Fifth Edition, 1921, p.679.

*Alumni Record of Wesleyan University*, Centennial (Sixth) Edition, 1931, p.227.

Edger Stanton Maclay, "Maclays of Lurgan" (マックレー一族の家系図)

- (7) マックレーが大学を離れた時点で、卒業していたのかどうか、現在のところ不明である。

前出(6)の *Alumni Record of Wesleyan University*, Third Edition, 1881-3, では1873年5月に「最終学年の途中で」学校を離れたとなっているが、マックレーの講演会資料である "Popular Illustrated Lectures upon Oriental Subjects by Aythur C. Maclay", REDPATH LYCEUM BUREAU（年代等は不明）には、「大学での学業終了後」に離れたことになっている。

- (8) 外務省記録『外国人雇入鑑（自明治五年）』、第18号、頁数の記載なし、同じ頁に、「7年12月15日返納」とも書かれている。

- (9) 『内務省年報』復刻版、三一書房、1982、p.334.

- (10) 鹽谷良翰『回顧録』鹽谷恒太郎発行、1918、p.338.

- (11) 前掲(5)「東奥義塾来歴」、pp.4-5.

- (12) 外務省記録『官雇入表（自明治九年）』（789号、工学寮）、及び外務省記録

『外国人雇入取扱参考書共四（自明治九年至明治十年）』共に頁数の記載なし。ただし、この記録では英国人と記載されている。これは、工学寮の教師陣の人選を伊藤博文が英国に出向いて担当し、実質的校長であったとされるヘンリー・ダイアー Henry Dyer がスコットランド出身であったのを始めとして、英国人中心の人選であったことから（『東京大学百年史』通史一、東京大学百年史編集委員会、1984、pp.649-663）、マックレーが実際には米国人であったにもかかわらず、英国人と記載されたとも推察される。

- (13) 「工部省沿革報告」『明治前期財政経済史料集成 第十七巻ノ一』明治文献資料刊行会、1964、p.400.

- (14) 前掲(13)「工部省沿革報告」、p.346.

- (15) 前掲(12)『官雇入表（自明治九年）』、頁数の記載なし。

- (16) マックレーの兄ロバートは、父と同様宣教師の道を歩んだ（前掲(6) *Alumni Record of Wesleyan University*, Third Edition, -Centennial (Sixth) Edition）。また、弟ジョージも若くして亡くなったが宣教師を目指していた。

- (17) Arthur C. Maclay. *A Budget of Letters from Japan: Reminiscences of Work and Travel in Japan*, A. C. Armstrong & Son, New York, 1886.
- (18) Arthur C. Maclay. *Mito-Yashiki: A Tale of Old Japan*, G.P.Putnam's Sons, New York, 1889.
- (19) *The Japan Weekly Mail* March 8th, 1890. 尚、このジャパン・ウイークリー・メールの書評で取り上げられた人々は、グリフィス(William Elliot Griffis)、チェンバレン(Basil Hall Chamberlain)、サトウ(Ernest Mason Satow)、バード(Isabella Lucy Bird Bishop)などで、日本論執筆に関するかぎり錚々たるメンバーが多かった。ジャパン・ウイークリー・メールの書評を分析した稲岡勝氏は、書評がでるといことは居留地で話題になったことを意味していると指摘している(「稲岡勝『ジャパン=ウイークリー=メール』の書評」『横浜の本と文化』、横浜中央図書館、1994、pp.462-467)。
- (20) 前掲(6) Edger Stanton Maclay, "Maclays of Lurgan"
- (21) 『水戸屋敷』に転載された *New York Herald, Brooklyn Daily Times* の書評 (Maclay: Mito-Yashiki, 頁数の記載なし)
- (22) 以下、主人公の行動を簡単に述べる。主人公プラットが弘前で勤務した学校は、旧藩主の財政援助を受けている Toogu-Gakko で、期間は3月頃から11月頃までである。11月にこの学校を離れる主人公に対して、送辞を読み津軽塗などの贈り物を渡した人物は SAGAKI である。弘前を離れた後、主人公は明治8年に東京の学校に勤務する。学校名ははっきり書かれていないが、教え子達の作文を紹介した中に、「来年の工学寮の試験に合格したい」(Maclay, p.172.) という記述が見られることから、少なくともこの主人公が教えていたのは工学寮を目指す学生達である。主人公はここで2年ほど教え、学校が閉校されたため職を辞した。最後に主人公が勤務したのは京都の学校で、契約期間は明治10年夏頃から1年である。しかし孤独感をつのらせたことや、体調不良などの理由で明治10年12月に辞職、明治11年1月には横浜にもどり、まもなく日本を離れた。
- (23) Maclay, *A Budget of Letters from Japan*, Preface.
- (24) *ibid.*, p.84.
- (25) *ibid.*, pp.88-89.
- (26) W. E. グリフィス著、山下英一訳『明治日本体験記』平凡社東洋文庫、1984.
- (27) 前掲(11)『東京大學百年史』通史一、pp.662-663
- (28) Maclay, p.41. 尚、原文は次のようになっている。"Everything was silent and dark. No street lamps anywhere. Here indeed was real Japan."
- (29) マックレーの本に書かれている明治7年当時の東奥義塾については、別稿「明治初期津軽の洋学受容と米国人教師—アーサー・C. マックレーの日本体験記を中心に—」として発表予定である。
- (30) この本の中ではミスターAとして出てくるが、これは明治7年から8年にかけて弘前に滞在したアリヴェのことであり、考えられる。アリヴェはカトリック宣教師であり、旧士

族岸篤と共に弘前に来た人物である。外務省記録では明治7年6月1日より東奥義塾教師として雇用されたことになっているが（外務省記録『外国人雇入鑑（自明治五年）』、第34号、頁数の記載なし）、東奥義塾でアリヴェを雇用した事実はない。アリヴェは「陶化学舎」を開いたり（前掲10鹽谷良翰『回顧録』p.338）、ワインの製造法を伝えたりしたもの（藤田本太郎『弘前・藤田葡萄園』、木村義昭発行、1987、p.32）、宣教自体はうまくいかず弘前を去っている。

マックレーはメソジスト派宣教師の息子であり、その後任イングもメソジスト派宣教師であった。マックレーの文章からは、宗派の異なる宣教師達による地方での伝道において、様々な軋轢があったことがわかる。この件に関しては、小野忠亮『宣教師・植物学者フォーリー神父』（キリシタン文化研究会、中央出版社、1977）のなかに収録されているアリヴェの書簡の中にも、当時の様子を窺わせる内容が書かれている。尚、アリヴェは弘前を去った後、教会での活動をやめ、東京外国語学校などで教師として活躍、仏和辞書の編集など日仏交流に貢献をしたことから、明治21年に勲五等雙光旭日章、明治29年に勲四等瑞宝章、明治35年に勲六等旭日小綬章を贈られている。

- (31) 東奥義塾の塾長であった杉山壽之進は、明治6年に東奥義塾初の外国人教師ウォルフ夫妻が弘前に到着したとき、「攘夷外思想未だ脱せざる」弘前が大騒ぎになった様子を伝えている（『塾友終刊記念号』東奥義塾、1911年、p.2）。マックレーが弘前にいたときも、状況はさほどかわらなかつたようである。『書簡集』の中には、散歩の途中のマックレーが一人で行方をくまらしたときの、東奥義塾関係者の震撼ぶりが書かれている。
- (32) 前出(7) “Popular Illustrated Lectures upon Oriental Subjects by Aythur C. Maclay”
- (33) 以下の文章は拙訳による。原文はp.57からp.65までである。
- (34) マックレーは学校を通してどこに申し込んだのか書いていないが、弘前城は明治4（1971）年9月21日に兵部省の管轄に属している（『津軽承昭傳』、歴史図書社、1976、p.315）ため、おそらく軍の関係であったと考えられる。
- (35) この「二階建ての門」の原文は、“a double-storied tower”である。
- (36) この「不気味な鬼」の原文は“weird dragons”である。この“dragons”は「龍」のほかに、「悪魔」という意味ももつことから、これは鬼がわらのことを指していると推察される。
- (37) この「番所」の原文は“tea-booths”である。
- (38) 「明治三季八月現在御本城絵圖」『絵図に見る弘前の町のうつりかわり』弘前市立博物館発行、1984。
- (39) 「明治初年弘前市街図」『弘前市史（全二巻）明治・大正・昭和編』、弘前市史編纂委員会 名著出版、1973。
- (40) 史跡弘前城跡三の丸庭園発掘調査団編『史跡弘前城跡』（史跡弘前城跡保存修理事業三の丸庭園発掘調査報告書）、弘前市、1984、p.17。
- (41) 『長尾日記抄』尚、この日記は、藤崎町在住の佐藤幸一氏の御厚意で拝見したものであ

る。

42) 前掲40『史跡弘前城跡』P.23

43) 明治8年当時軍隊に入った小笠原金助という人物が、「私ハ明治八年四月、弘前旧城江(へ) 賦兵として第二十大隊に編入サレタ」と書き残している(『藤崎町史』第2巻、p.42.)。この人物を直接知っていた前出の佐藤氏によると、小笠原は、宿舎が本丸御殿であったことを述べていたということである。

## 主要参考文献

- 飯田 巽『津軽承昭公傳』津軽承昭公傳刊行會、1917.
- 小野忠亮『宣教師・植物学者フォーリー神父』、キリシタン文化研究会、1977.
- 鹽谷良翰『回顧録』鹽谷恒太郎発行、1918.
- 長谷川虎次郎『菊池九郎先生小傳』菊池九郎先生建碑會、1935.
- 本多 繁『続・米国のプロテスタントイズムと日本人—忘れられた明治の基督教学校と宣教師達—』明治プロテスタントイズム研究所、1994.
- 森 林助『津軽弘前城史』弘前市史別冊、名著出版、1973.
- 『絵図に見る弘前の町のうつりかわり』弘前市立博物館発行、1984.
- 外務省記録『華士庶外国人雇入鑑(自明治五年十月至明治六年十二月)』.
- 外務省記録『外国人雇入鑑(自明治五年)』.
- 外務省記録『官雇入表(自明治九年)』.
- 外務省記録『外国人雇入取扱参考書共四(自明治九年至明治十年)』.
- 「工部省沿革報告」『明治前期財政経済史料集成 第十七卷ノ一』明治文献資料刊行会、1964.
- 『開学百年記念 東奥義塾年表』東奥義塾、1972.
- 『史跡弘前城跡』(史跡弘前城跡保存修理事業 三の丸庭園発掘調査報告書。)、弘前市、1984.
- 『写真でみる東奥義塾百二十年』東奥義塾、1992.
- 『塾友終刊記念号』東奥義塾、1969.
- 『東奥義塾九十五年史』東奥義塾、1967.
- 『東奥義塾再興十年史』東奥義塾、1931.
- 『東奥義塾再興三十年史』東奥義塾、1952.
- 『弘前市立弘前中学東奥義塾沿革誌』東奥義塾、1908.
- 『東奥義塾一覽』東奥義塾、1878.
- 『東京大學百年史』(通史一) 東京大学百年史編集委員会、1984.

『内務省年報』復刻版、三一書房、1982.

『弘前市史（全二巻）明治・大正・昭和編』、弘前市史編纂委員会 名著出版、1973.

『横浜の本と文化』、横浜市中央図書館、1994.

*Alumni Record of Wesleyan University*, Third Edition, 1881-3.

*Alumni Record of Wesleyan University*, Fourth Edition, 1911.

*Alumni Record of Wesleyan University*, Fifth Edition, 1921.

*Alumni Record of Wesleyan University*, Centennial (Sixth) Edition, 1931.

Arthur C. Maclay, *A Budget of Letters from Japan*, A. C. Armstrong & Son, New York, 1886.

*The Japan Weekly Mail* March 8th, 1890.

(きたはら・かなこ 東北大学国際文化研究科博士課程後期)